



国際ロータリー第2800地区 1959年6月9日創立

鶴岡ロータリークラブ

例会場 東京第一ホテル鶴岡(鶴岡市錦町2-10)

例会日 毎週火曜日(12:30~13:30)

令和5年9月5日(火) 第3027回 例会 (本年度第7回)

9月19日(火)	祝日休会
9月26日(火)	理事会(10月)・インフォーマルミーティング
10月1日(日)	海岸清掃・RAC/ IAC合同例会 【10/3(火)は振替休会】
10月10日(火)	祝日休会

Eメール◎tsuruoka08@rid2800.jp ホームページ◎<https://www.tsuruokarc.org/>



会長挨拶

会長/富田 喜美子

8月の花

8月の花の代表にひまわりがあります。この花はキク科の一年草で茎は直立し、長い柄を持ち葉は互生しています。

この頃では小ぶりのひまわりも出回ってフラワーアレンジメントなどに重宝されています。ひまわりは漢字で「向日葵」と書き、太陽に向かって咲くと言われますが、事実日に向かって花が回るということはないです。

この花は真夏の暑い中、田舎の庭や道端などに濃い黄色の大きな輪のように咲き、遠いところからもよく見えます。

中心部の多くの種はその子孫を増やすのは当然ですが、炒って一種のナッツのように酒のお供としても食されますし、料理に使うひまわり油も健康に役立っています。

ひまわりの咲く時期によくテレビや新聞など紹介されますが、それは何万本かのひまわりの花で迷路を作り誘客に役立っているところがあります。高さは2メートルにもなるのでゴールに辿り着くのに一苦労ようです。近場では羽黒町の月山高原にあるようです。機会があれば是非訪ねることをお勧めします。

因みに、日本の気象衛星の愛称が「ひまわり」です。昭和52年(1977年)打ち上げ1号からこの名前が使われています。



茨木のり子の終活

茨木のり子 六月の会 戸村 雅子氏



はじめに

茨木のり子について(1925年生~2006年没)

茨木のり子の母、宮崎勝は三川町出身。のり子の夫、三浦安信は鶴岡市出身の医師。したがって庄内、鶴岡に血縁の人が

多い。

茨木のり子は「現代詩の長女」と言われ、現代詩ではトップレベルの詩人。

有名な詩句「自分の感受性くらい/自分で守れ/ばかものよ」、「寄りかからず」、「わたしが一番きれいだったとき」など。

2006年、没後、鶴岡市加茂、浄禅寺にある夫の三浦家の墓に眠る。

1 三浦安信・のり子夫妻の愛の歴史

1945(昭和20)年 敗戦

1947年 のり子三川町の大瀧家に滞在。
昭和天皇の庄内巡行を見る。

1948年 三浦安信と宮崎のり子、温海温泉「ホテル萬国屋」で見合い。互いに一目ぼれ。

1949年 結婚し、翌年から詩を書き始める。

1955年 第一詩集『対話』発刊。

1961年 安信、くも膜下出血で入院。

1963年 父、宮崎洪、死去。

1975年 安信、肝臓がんのため死去。

1976年 ハングルを習い始める。

1990年 翻訳詩集『韓国現代誌選』を花神社か

出席報告

会員数	23名
出席	14名
出席率	63.64%
前々回確定出席率	68.19%

RI会長 ゴードン R. マッキナリー

地区ガバナー 伊藤 三之

会長/富田喜美子 副会長/上野欣一 幹事/菅原成規 会長エレクト/佐々木仁道
会報委員会/高橋隆人・佐藤友行・佐藤孝子

事務局:山形県鶴岡市錦町2-68 鶴岡SSビル1F TEL(0235)28-3375 FAX(0235)28-3376

ら刊行。

- 1991 年 右の詩集で読売新聞社賞受賞。
1999 年 旧鶴岡市制 75 周年記念合唱組曲「はじめての町」(作曲、佐藤敏直 作詞、茨木のり子) 完成。
2000 年 大病を患い大動脈解離、乳がんの手術。
2002 年 弟、死去。
2003 年 緑内障、眼科の医者「あまり長生きを望んでおりません」。川崎洋、死去。
2004 年 石垣りん 死去。
2005 年 10 月 戸村「お会いしたい」(最後の面会、茨木の死の四カ月前)
茨木「遠くへ旅立ちの準備で、家の中はごった返ししています。でもいいですよ」。
2006 年 2 月 17 日 茨木のり子、クモ膜下出血で死去。79 歳。夫の眠る三浦家の墓に納骨。
2007 年 甥の宮崎治、遺品となった『歲月』を花神社から出版。

2 詩集『歲月』は、夫への恋文

急がなくては

急がなくてはなりません

静かに

急がなくてはなりません

感情を整えて

あなたのもとへ

急がなくてはなりません

あなたのかたわらで眠ること

ふたたび目覚めない眠りを眠ること

それがわたくしたちの成就です

辿る目的のある ありがたさ

ゆっくりと

急いでいます 『歲月』

3 茨木のり子の終活

宮崎治(甥)へ遺言

- ・自分の死のシナリオを語る。
- ・葬式。
- ・別れのあいさつ文を創る。

1972(昭和 47)年 ——木下順二の母逝く。
木下順二のあいさつ文に感動。「この葉書を大事に今に至るまで保存してきたのも、いつの日にか私のための良き参考にと考えたから」——「お別れの手紙」を参考にしている。

- ・遺言書を書く。
- ・死後に出して欲しい詩集の依頼



第一例会出席の米山奨学生リ・テイテイさん(上)と青少年交換留学生荘宗祐(アラン)君(下)



😊 スマイル

- 富田喜美子君 戸村さん興味深いお話をありがとうございました。テイテイさん、宗祐君今日はご苦勞様でした。
- 西川富美子君 戸村先生、本日は貴重なお話をありがとうございました。終活については考える年代となりました。荘宗祐君ようこそ鶴岡へ。いろいろ経験して楽しんでお勉強してください。本日米山奨学生カウンセラーの委嘱状をいただきました。リ・テイテイさん、五ヶ月となりました。引き続きよろしくお願いいたします。
- 佐藤 友行君 ソウスケ君が意義深い留学生生活を送ることを御期待いたします。
- 高橋 弘美君 戸村雅子さん、リ・テイテイさん、アラン君ようこそ。雅子さん今日は素晴らしいお話ありがとうございました。
- 富樫 松夫君 ◎戸村様、スピーチありがとうございました。
◎宗祐君、学校生活、人と人との交流を楽しんでいて下さい。